

最近のESRI研究成果より

アメリカ経済学会年次総会
体験記内閣府政策統括官(経済財政分析担当)付
参事官(企画担当)付

酒井 遼

はじめに

2025年1月3日から5日にかけて、各国からエコノミストが集う世界最大規模の経済学会であるASSA (Allied Social Science Associations) 年次総会が開催され、筆者を含む内閣府職員9名が派遣された。本稿では、年次総会の概要のほか、印象に残った論文や本研修への参加を通じて得た全般的な所感を、徒然と書き綴りたい。

ASSA年次総会の概要

ASSA年次総会は、毎年1月初旬の3日間、アメリカ全土から選出された主要都市にて開催される。本年の舞台は、西海岸のカリフォルニア州サンフランシスコ。経済学の各分野に加え、隣接する学問分野で日々探求を究める専門家が一堂に会し、最先端の研究成果の発表の場となる。また、研究者に限らず、民間の実業家や政策立案者、統計作成者等、「経済」を主軸に様々な経歴を持つエコノミストの交流の機会という側面もある。開催前日に招かれた立食形式のレセプションパーティーでは、会場の至る所で歓談に花が咲き、翌日から始まるアカデミックな祭典を目前に、誰もが期待に胸を弾ませていた。

サンフランシスコの中心市街地であるユニオン・スクエア周辺に密集する大型ホテル群の会議室が、総会期間中はASSAによって貸し切られ、同時並行的に複数のプログラムが進行する。合計で500を超える学術セッションは、大部屋での開催にもかかわらず会場から傍聴者が溢れるものから、こぢんまりとした小部屋で聴き手との対話を重ねつつ議論を深めるものまで、実に様々。各プログラムは基本的に1枠2時間構成で、早いものはなんと朝8時より開始！また、プログラム間の会場移動の際には、ロビーや会場の入り口付近で、知り合いとばったり出会い頭の立ち話に興じる

人々を数多見かけ、活気に溢れる大学のキャンパスライフさながらであった。

プログラムの主旋律を成す論文セッション (Paper Session) では、古典的なマクロ・ミクロ経済学の研究成果に加え、経済政策が投票行動・ポピュリズムに与える影響を分析した政治経済学や、自己認識のバイアスや記憶の不完全性に焦点を当てた行動経済学等、近年注目を浴びる社会的関心事項を扱う発表も少なくなかった。

一方、パネルセッションでは、論文セッションのアカデミックな厳格さとは多少毛色を異にし、著名なパネリストにより足下の経済動向や通商政策等について、比較的フランクな雰囲気の中で議論が交わされた。バーナンキ元FRB議長や、金融政策のテイルールルの提唱者であるジョン・B.テイラーが出席するセッションには多くの傍聴者が押し寄せ、不確実性が高まる今後のトランプ政権による経済政策への処方箋を求めた。



(年次総会では会場内の至る所に、ASSAの看板が設置されている)

プログラムに参加して

筆者が参加したプログラムの中で、特に印象に残った論文・発表等について2つほど書き記したい。

1つ目は、米国国勢調査局が主導するMOVSプロジェクトを紹介した、“Mobility, Opportunity, and Volatility Statistics (MOVS) : Infrastructure Files and Public Use Data” (Jones et al. (2024)) である。MOVSプロジェクトでは、米国の税務記録と人口統計記録に基づき、年齢・性別・人種・所得等の大規模なマイクロデータの整備が進められ、従来よりも細かな粒度で米国内の所得の不等や移動パターンの実態が解明され始めている。現在所属する経済財政分析担当では公的統計やビッグデータを基に経済分析を行うため、本プログラムが実務と繋がっており、米国の先進的な取り組みから我

が国の現状を相対化する視点を得ることができた。

2つ目は、行動経済学の観点から合計特殊出生率について分析した、“Asymmetric Fertility Elasticities” (Engle et al. (2025)) である。合計特殊出生率が、出生促進政策よりも出生抑制政策に反応しやすいという非対称性を、行動経済学の参照点依存性と損失回避性の概念に基づき説明を試みた。すなわち、人は一世代前と比較して同等かそれ以上の生活水準（価値基準の参照点）を求める傾向があり、また、出産・育児を通して得る効用（幸福度・満足度）よりも付随する費用の増大を避ける傾向（損失回避性）と相まって、経済社会のファンダメンタルズが大きく変化せずとも、長期的には合計特殊出生率が低下する可能性を指摘した。本論文は、人口減少に苦慮する世界各国の政策立案者に重要な示唆を与えている。

恥ずかしながら筆者は、参照点依存性の概念を本プログラムで初めて学んだ。「より強く、より速く、より大きく」の資本主義の論理が貫く現代、もしも無意識に想定する参照点が、既に十分な地点に到達しているとしたら？ しかし、その「十分な地点」の判断基準はどこに在るのか？ 禅問答のような問いの間で反復横跳びしながら、日常のタスクから一旦離れて、物事を少しでも深く考えてみる時間も大切にしていきたいと改めて実感した。

おわりに

ところで、メイン会場が密集するエリアから少し離れたホテルに宿泊した筆者は、徒歩で会場に向かうのが常であった。その道程で通るのは、在サンフランシスコ日本国総領事館より注意喚起されているテnderロイン地区。高尚な経済論議が飛び交うホテル群の側

で項垂れる麻薬中毒者やホームレス。なすすべもなく通り過ぎる。街の匂いや音、視界に入る情景を、「経済」に関わる人間として、決して忘れるわけにはいかないのだと思う。



（バーナンキ元FRB議長（右から2番目）が参加するセッション）

総じて、「経済」が内包する多種多様性とその奥深さを思い知る、濃密な3日間となった。また、経済学的知見や語学力を磨くのは当然として、jet lagをも優に撥ね除ける基礎的な体力こそ、疎かにしてはいけなと切に感じ入った。この機会に巡り会えた全ての事象と関係者との縁に感謝しつつ、ここに筆を置くこととする。

〈参考文献〉

- Bee, A., Eng, A., Houghton, K., Jones, M. M., Pharris-Ciurej, N., Porter, S. R., Rothbaum, J., and Voorheis, J. “Mobility, Opportunity, and Volatility Statistics (MOVS): Infrastructure Files and Public Use Data” Census Working Papers, April 2024
- Engle, S., Pang, C., and Zhou, A. “Asymmetric Fertility Elasticities” Unpublished (ASSA 年次総会公式サイトに掲載), 2024.

酒井 遼（さかい りょう）



（年次総会派遣者と会場にて）